

多田雅史

件名: 全国ベンゾジアゼピン薬害連絡協議会 (BYA)【情報 Vol.199】

各位 (本情報提供メールは当会会員、協力弁護士、協力医、報道機関、医療過誤団体、野党政党等の約400カ所へBCC送信しています)

全国ベンゾジアゼピン薬害連絡協議会 (BYA) の多田雅史です。

本メールはベンゾジアゼピン (BZD) 関連情報をお送りしています。

- (1) 新規の情報提供希望者が身近におられた場合、BYA-HPの「お問合せ」をご紹介ください。
<https://www.benzodiazepine-yakugai-association.com/>
- (2) 有用な情報をお持ちの方は本メールに返送してお知らせください。皆さんに情報提供します。
- (3) 情報の中で「拡散すべき情報」があれば、皆さんの判断で自由に「転送・SNS拡散」してください。

【目次】

1. ヒラメ裁判官とヒラメ検事
2. 『道徳感情論』と同感 アダム・スミス
3. 鍼灸によるうつ病の治療 心に効く「ツボ」の存在
4. 依存性は気になるけれど…デパスの首位変わらず (添付)
5. 再掲載: BZD中止時の症状 【右図参照】

【記事】

1. ヒラメ裁判官とヒラメ検事

(1)上(つまり最高裁事務総局)ばかり見ている「ヒラメ裁判官」が多いのは周知であるが、検事総長が「官邸の番犬」になれば、「ヒラメ検事」が増殖するだろう。これで、与党政治家は起訴されず、警察・検察は放置しておくことになる。逆に、野党政治家は「集中取り締まり」が始まるかも。

(2)検察庁法改定案反対 検察OBの意見書 (全文添付)

主権は国民であるから、検事総長は「国民審査」を受けるべきである。

2. 『道徳感情論』と同感 アダム・スミス

http://ww1.tiki.ne.jp/~y-mitsu/shakai/keizai_03.html

(1)同感の概念

商売をする時、人は自分が儲ける事しか考えない。なのになぜ、世の中の秩序は保たれているのか。自分の事しか考えないのだから、自分の利益の為に強盗や殺人をするということが頻発してもおかしくないのに、なぜ世の中は無秩序に陥らないのか。

それは人が他人から「同感」を得る事を望むから。

商売のやり方の中で「うまいことやってるよな」と嫉妬をかいつつも、「まあそれくらいはやるだろう」と他人からある程度「同感」が得られれば、その商売は続けられる。でも、「そこまでやるか、人として最低だ」と他人から「同感」を得られなくなるとその商売はやがて成り立たなくなる。

だから人は他人から「同感」を得られるギリギリのラインを意識しながら行動するようになる。

そして人がその「同感」を意識しながら行動することによって、「結果的に世の中の秩序は保たれている」という考え。

(2)『道徳感情論』の経済学

<http://nihonshiki.sakura.ne.jp/economics/AdamSmith01.html>

『道徳感情論 (The Theory of Moral Sentiments)』は、1759年に刊行されたアダム・スミスの処女作です。スミスは、利己的に思える人間が、道徳的に振る舞うことができる謎について説明しています。

2020/05/18 16:55

いかに利己的であるように見えようと、人間本性のなかには、他人の運命に関心をもち、他人の幸福をかけたがえのないものにするいくつかの推進力が含まれている。人間がそれから受け取るものは、それを眺めることによって得られる喜びの他に何も無い。哀れみや同情がこの種のもので、他人の苦悩を目の当たりにし、事態をくつきりと認識したときに感じる情動に他ならない。』

最近、TVで聞いたアダム・スミスの『道徳感情論』の経済学。ベンゾジアゼピンには直接関係ないですが、この世のバランスは、「利己と利他のバランス」のように感じる。つまり、利己主義でも利他主義でも成り立たず、その2つのバランスだろう。**医療訴訟が「医療者や裁判官の利己一辺倒」であれば、世のバランスは崩れる。**

3. 鍼灸によるうつ病の治療 心に効く「ツボ」の存在

https://www.nhk.or.jp/kenko/atc_1132.html

以下引用

『なんだか気分が晴れない。病気ほどではないけど、体調がすぐれない。そんな人たちの悩みを解消する手段として、東洋医学が注目を集めています。イギリスでは、うつ病治療の選択肢として、薬が効かない患者への効果が確認され、日本の研究からは、「脳活動の活性化」が期待される結果も出てきました。』

薬物を体に入れない治療方法の方が安全には違いない。

4. 依存性は気になるけれど…デパスの首位変わらず（添付）

<https://medical.nikkeibp.co.jp/leaf/mem/pub/series/survey/202005/565582.html>

以下引用

『日経メディカル Onlineの医師会員を対象に、抗不安薬のうち最も処方頻度の高いものを聞いたところ、56.1%の医師がエチゾラム（商品名：デパス他）と回答した。』

第2位のアルプラゾラム（コンスタン、ソラナックス他）は11.0%、第3位のクロチアゼパム（リーゼ他）は8.1%の医師が、最も処方頻度の高い薬剤として選んだ。』

『**第1位のエチゾラムを処方する理由**

（デパス他）

・即効性もあり効果も十分なので、重宝しています。ただし依存性の問題があるので、使用は頓服程度にしています。常用させる場合には、セディールなどを用いるようにしています。（40歳代病院勤務医、一般内科）

・正直あまり使わないようにはしています。デパスは前医からの引き継ぎで継続しますが、依存性が強いのが問題で、新規は極力使わないようにしています。（50歳代病院勤務医、循環器内科）

・依存性、転倒リスクなどでやり玉に挙げられています。自分では、適切な使用を心がけています。前医の処方継続の場合には、減量に苦心します。（50歳代病院勤務医、一般内科）』

不眠症は薬物で治療すべき疾患ではなく、生活改善で治すべき「体調不良」である。農家さんで、日の出とともに働き、日没とともに休む生活の人に不眠症はいない。ベンゾジアゼピンを使用すれば、「薬物依存へまっしぐら」となり、容易に元へは戻れない。

5. 再掲載：BZD中止時の症状【右図参照】



全国ベンゾジアゼピン薬害連絡協議会 多田雅史